

櫻井守正編

『北海道酪農の経済構造』

崎浦誠治

—

ここ数年來北海道酪農研究の主要な関心は酪農業の定型化、安定化の問題を解くことに向けられている。北海道の酪農業がその経済経営においていまだ「定型」というべきものを発見してもいなければ、まして樹立もしないことは、かつて伊藤俊夫博士がその著『酪農経済論』（昭和二六年）の中で強調されたところであるが、それ以来このいわばテーゼともいうべきものを実証し、ひいては安定的な経営条件が何であるかを探究しようとする気運が濃厚になってきた。こうした気運は、これを従来の研究主題と比較するとき、すこぶる特徴的といえる。すなわち従来は戦前、戦後をつうじて、たとえば「北海道酪農経済論の一節」（伊藤博士 社会政策時報第二三〇号所載 昭和一四年）より「北海

道酪農政策の基本的諸問題」（西尾幸三氏、農業総合研究所研究叢書第一九号、「北海道酪農の研究」所載）につらなる一連の研究成果に見ることが、どちらかといえば北海道酪農の発展過程に着目したものが多かった。もとよりそれ以外にもたとえば経営的観点からする劣作（渡辺侃博士「北海道の酪農」『北方農業』五百号記念号所載、および伊藤博士「北海道の酪農経営」前掲『酪農経済論』第四章等）や、国際環境における位置づけをねらいとして、市場条件の分析に重点をおいた論稿（例えば逸見謙三氏「北海道酪農業の経済」前掲『研究』所載）もないではないが、しかし、一般的には発展過程の分析が主流をなしていたようである。厳密にいうならば「一節」は生産機構を中心として考察されており、「基本的諸問題」は酪農政策を論点としているという差異はあるが、いずれも発展過程を明かにすることが主題となっている点において共通している。しかれば、何故この種の研究が主流をなしていたか。けだし北海道酪農業の経済は、周知の如く、大正末年をもつて動態化に転じ、以後急速な発展をとげてこんにちにいたつたのであるが、その際これがいかにして発展をとげてきたかを見定めることが何よりも重要であつたからであらう。

ところが最近にいたつて酪農問題の所在が多少変つてきた。それというのは、戦後経営規模の零細化傾向が進み、加えて牧野解放によつて牧野面積が縮小するなど酪農の契つて立つべき基盤が

脆弱化したからである。飼育頭数五頭以上の比較的大きな酪農経営は著減し、一―二頭飼育農家が増加した。そこへもつてきて外国産乳製品の輸入問題が機会あるごとに提起されて、それが陰に陽に国内酪農業を牽制し、圧迫する結果となつてゐる。かくて酪農業の安定化、定型化を要望する声が熾烈となるのは当然といわなければならぬ。こうした情勢を反映して現れたのが本書をはじめとして、『牛乳生産費の分析』（北海道農業研究所、研究資料第一二号、昭和二八年）『北海道酪農経営の諸形態』（北海道農業研究第五号、昭和二九年所載）等一連の調査研究である。これらはそれぞれ素材を異にし、方法も同一でないが、いずれも直接間接北海道酪農の定型化、安定化を探究する点において同一の系列にあるとみてよい。とくに本書『北海道酪農の経済構造』は総研本所と北海道支所との協力のもとに、アンケート式、個別農家調査、全道統計方法等多角的調査方法を用いて、安定的な経営条件が何であるかを構造的に、明かにしようとした最初のものである。以下これについて若干論評を試みることにする。

二

本書は「北海道の中核地」たる十勝の二町村すなわち「旧開地帯での減退傾向を」代表する清水町と、「新開地帯における発展傾向」を具現する大樹町との実態調査を基礎として論述されてい

るが、これを単なる「事例調査に止まらしめず、一般化して考察し得るようなものたらしめ」（はしがき）るために、既存の統計資料、報告書、文献等によつて酪農の地位とその展開を概観し、十勝および調査町村の位置づけを行つと共に（序章「十勝酪農の概観」）、そこにおける乳牛飼育の実態に關して「予備知識」を与えた後（アンケート調査）、主題に入り、「酪農経営」（第一章）「牛乳の集荷・加工」（第二章）、「酪農家の組織」（第三章）、および「酪農政策」（第四章）、の四方面から酪農の現状認識とその安定化のための条件に接近している。なおそのほかに「乳製品の国際市場」（補章）について論及し、「第二章の敘述を補足」と共に、以上各章での分析結果を「総括」（第五章）において要約列挙してとり纏めてゐる。

ところでまず「酪農経営」についてみるに、本章をつうじて言わんとするところは概ね次の三点に要約されるであらう。

（一）「地力も高く、耕種商品生産の地位も高い」（一五〇頁）
「集約的な旧開地では、主として地力維持のために、また耕地面積の相対的に狭い農家では労働吸収のために乳牛が飼養されている」（四二六頁）。これに反して「濃霧地帯の一部になつており、開墾も比較的新しい」（一五〇頁）「粗放的な周辺地では、販売作物生産の自然的、経済的立地条件に恵まれず、乳牛は土地利用の手段として飼養されている。ここでは、乳牛飼

養頭数の多少が経営規模の大きさを示す指標となっており、酪農家の飼養規模拡大の意欲も盛んである」(四二六頁)。「これが、乳牛飼養が清水町に於て伸び悩み、大樹町に於て伸びつつありと言われる実態である」(一五〇頁)。しかし「これらのことは、同一地帯内における地力の高低にもとづく立地区分についても言える」(四二六頁)。

(イ)「乳牛飼養経営はいまだ十分安定しているとは思われない。従来の経営組織に乳牛が加つただけで、とくに自家労力の過重労働負担においてなされているからである。また耕種、とくに豆作との競合から、現在の乳牛飼養部門の経営収支からみて望ましい乳牛飼養規模に達することがなかなか難しいからである」(四二六～二七頁)。

(ロ)「牛乳生産費調査資料から推察すると、搾乳牛三頭、または牛乳生産三、〇〇〇貫以上になつて辛うじて牛乳商品生産経営の採算がとれることになるから、少くとも此の規模になることが望まれる」(一五一頁)。「豆作の相対的に有利な条件の下では、旧開地や地力の高い立地では乳牛飼養を中規模にしたものが、周辺地や地力の低い立地では比較的大規模のものが農業経営の収益も高い。したがつて一般には、地力の高低に應じてそれぞれいま述べたような規模への方向が農業経営合理化の目標となろう」(四二七頁)。

このうちまず第一点について検討しよう。本章をつうじて詳細、具体的に述べられているように、清水および大樹両調査町村の乳牛飼養形態は明かに異なる。前者は耕種商品生産に重点をおき、これと乳牛飼養とが結びついて、いわば商品生産を遂行するための地力維持(小規模農家では労働吸収)を目的として乳牛を飼養しているのにひきかえ、後者では土地利用の手段として酪農が営まれ、輪作が重視されてその中の飼料作で乳牛を飼ひ、乳牛を主とする経営が発展的とされている。こうした差異は、本書によれば、ひつきよう主として開発の新旧、地力の高低、濃霧の影響、交通地位等総じて自然的、経済的「立地」条件もしくは「環境」に帰着せしめられているものごとくである。ことに地力の高低は、この場合、とくに重要視され、「地力の高い立地で——開発年令も古いものが多いが——営農するものは王として地力維持や労働吸収のために乳牛を飼養し、地力の低い立地で——遅れて開発されたり、再開墾されたところが多いが——営農するものは主として土地利用の手段として乳牛を飼養している」(四二六頁)といきつてい程である。もとより農業経営組織における、地力をはじめとするこれら立地条件の影響は決してこれを過少評価することができない。しかし、さなき挙げた条件がすべてではない。もし「豆作との競合」を説くならば、豆類の価格と乳価との価格関係こそ重要である。従来の農業経営学

の伝統に倣しても、合理的経営がいかなる組織を採るべきかの問題は常に与えられた市場条件従つてまた一定の価格体系のもとで考案されたはずである。換言すれば一定の市場条件、価格体系が前提されていたわけで、ことにそれが経済動態のもとにおいて探究されるとき、価格問題わけても豆類と牛乳との価格関係についての論述は不可欠であるといつても過言でない。しかるに本書では、乳価および乳製品の市場条件に関する敘述はあるが(第二章および補章)、豆類の価格ならびにそれと乳価との価格関係に関する考察が欠けており、「豆作の相対的に有利な条件の下では」(四二七頁)というような表現が随所に散見するだけで、それ以上の掘りさがが行われていない。要するに十勝酪農が直面しているあらゆる経済「環境」に觸れておらず、したがつて本章全般をつらじて論述の力点はきわめて経営技術的に偏し、たとえば豆作と牛乳生産との「競合関係」といつても、主として労働の面におけるかち合いを論じ、「乳牛飼養労働分配のピークは九月と七月になつてゐるから、とくに収穫期及び中耕除草期における耕種労働と劇しく競合する」(一四六頁)ことを強調するにとどまり、価格関係を前提とする土地利用、労働、土地利用手段各般の競合について論じられていない。

第二点、すなわち乳牛飼養経営がいまだ十分安定しているといえないことは、かつて伊藤博士が指摘されたところであるが(前

述)、それが十勝農村の実態について具体的に確認、実証されたわけである。

第三点、すなわち牛乳生産費調査結果から推察して「搾乳牛三頭、または牛乳三、〇〇〇貫以上になつて辛うじて牛乳商品生産経営の採算がとれることになるから、少くとも此の規模になることが望まれる」(一五一頁)という点についてもいささか疑問がある。本書がこのような推察をくだす材料として帯広統計調査事務所管内の三頭飼育調査農家一戸の調査結果が用いられている。ここで材料の多少を問わぬこととしよう。だが、それにしてもこの農家は釧路国中浜村にあり、その経営内容に立入つて見れば、放牧にすくなくらず依存し、いわば根釧酪農の範疇に属すべき酪農家であることを看過すべきでない。(北海道農業研究所、研究資料第一二号参照)つまり根釧酪農の例をもつて十勝酪農に望ましい規模を推察しているわけである。しかも両者の異同については何等言及されていない。

三

(1) 十勝地方の酪農業は乳製品生産業として発達してきた。そして原料乳生産と加工過程とは「酪農業の確立期以後それぞれ社会的経済的性格をこにした経済主体によつてになわれてきたし、現在もまたそうである」(一六七頁)。すなわち原料乳の生

産過程は小生産農民によつて、加工過程のほとんどすべては二大資本によつてになつてゐる。こうした對極的關係を基軸にして酪農業が展開されている以上、小生産農民の對極たる二大資本の運動形態、蓄積形態に触れずして十勝といわず北海道の酪農業の安定化、定型化について語るができない。その意味で第二章「牛乳の集荷・加工」では専ら資本に着目して、「酪農民と乳業資本との關係のもろもろの形態と本質」（第一節）、加工過程上の諸問題（第二節）、および乳製品の市場条件（第三節）等を主題として分析をすすめている。そしてその結果「まさしくこれらの会社が資本の運動法則にたづぬかれていること」（二四六頁）を確認しつつ、「協同組合資本」「協同資本」「農民資本」等の規定は、この資本の實質的規定であり、しかも第二次規定であるといふことができるであらう」（二四九頁）と結論し、最近における「市場の梗概現象は二資本の独占性を結局はつよめている」（二五一頁）という考え方に到達している。

最初の基本的命題にはじまり、このような結論にいたる本章の論旨はきわめて鮮明で、教えられるところがすこぶる多い。が、ただ一点気にかかる箇所がある。第一節では次の如く述べられている。『これは（生産物確保のための特殊費用が資本によつて支出され、それが乳代から控除されるという手続……引用者註）、資本の買占商的、商人資本的側面のあらわれとみることができ

だらうが、しかしその「前貸」の具體的形態は、何よりも酪農民の生産活動の内容にたいする拘束をもたらしものである。その拘束は酪農民を資本の循環過程にくみいれるためのものであるから、この場合資本は産業資本と商人資本の「共生体」であるといつていいだらう。このことの結果、酪農民による原料乳生産過程は、多かれ少かれ、資本の循環過程にくみこまれ、また当然のことを（との誤植ならん……引用者）して、酪農民は乳牛飼養にかならずかぎり、多かれすくなかれ小生産者性を喪失することになる」（一八〇頁）。問題は「多かれすくなかれ小生産者性を喪失することになる」という点である。執筆者はただ論理的にそうなるというだけで、事実北海道の酪農民が小生産者性を喪失しているといつてゐるわけではないが、読む者をしてこの点をとり違えさせると、その結果農民運動の方向を見誤らせることになりはしないだらうか。しかも事實はどうか。ここで「乳牛飼養にかならずかぎり」という限定がつけられているので、耕種商品生産部門をもたない專業的酪農家のばあいを考えよう。かれらはえてして多数の乳牛を飼い、いわば上層農家に属する。そしてかれらの中のある者は、第三章に見るごとく、酪協、酪振の幹部としてそれぞれの組織を牛耳つてゐる（二六六、二九五頁）。ところが「彼等は単なる会社のエージェントに止るものではなく……会社の線と旧来の農村支配の構造との絡み合い」の上に居座つてゐる（三

二六頁)。とすれば、かれらの社会的、政治的立場はおのずから明かであろう。それでもなおかれらは「小生産者性を喪失することになる」と考えられるであらうか。要は、酪農民をとりまくるもろの關係―構造の中で資本に対するかれらの經濟的地位をそれぞれの階層に應じて位置づけることであらう。

(2) 酪農業の安定化が日程に上つているにも拘らず、加工過程の担い手たる二資本は市場の梗概現象を利用して結局ますますその独占性を強化しているとするならば、事態を改善すべき希望の一翼をになうものは酪農家の組織でなければならぬはずである。しかるに第三章での分析結果によれば、「これらの組織は、客觀的には、加工会社の御用機能的役割を果しているようで」「こうした「役割を果してゆく仕方は一般の場合と異つた特殊な、根強いものであり、一般の基準で律しきれぬものがあるようである」(三二二―三二三頁)。そして組織の指導者たちは、前述のごとく、「会社の線と旧来の農村支配の構造との絡み合い」の上に居坐り、他方中小酪農家は「経営の中心部門たる耕種生産についての不満は副次的部門の存在によつて積極的なものに燃え上らず、副次的部門についての不満は副次的なものだからという気持で積極的に出るに至らず、かくて両部門の不満の統一が妨げられて」(三三〇頁)八方ふさがりとなり、内攻せしめられている。しかしかかる「現在の酪農家組織の在り方に疑問なきを得ない」

(三三〇頁)。それは「彼等の利益を守りその發展を正しく」(同上)導くゆえんでない。「酪農家の組織体は民主的に運営されるべきであるし、民主化を促進するように運営されねばならぬ」(四三六頁)――第三章では大要このように述べられているが、本章は――北海道に関するかぎり――酪農家組織の研究の最初であり、ここでは論評をさしひかえたい。

(3) 酪農業の安定化、定型化を達成する上において酪農政策の果す役割はきわめて大きい。そのことは従来の北海道酪農政策の展開と酪農政策の關係から見て当然いえるし、それだけに酪農政策に寄せる期待も大きい。しかるに戦後の酪農政策はどうか。いわゆる無牛農家の解消をめざして牝牛貸付制度が採られてきたが、現地調査にもとづく考察の結果によれば(第四章)、「現状は總花的配布の感をまぬがれない」(三八〇頁)し、また必ずしも低位經濟力農家に導入するという趣旨が貫かれていない。現制度のもとでは「乳牛を導入するのみで、他の生産手段の供与、経営の積極的指導助成、土地問題の解決などの一連の対策にかけている」(四三二頁)。その結果「いよいよ乳牛を求めて得ざるより多数の農家群をとり残し」(四一八頁)ているが、たとい牝牛貸付の対象となつた一部少数の農家といえども、その飼育管理、酪農経営は「不完全かつ不充分」をまぬがれない。したがつて「その農民保護的立場をつらぬこうとするならば、まず何はともあ

れ、乳牛導入施策への広汎な欲求に対応して、一層多くの乳牛の配付をなしえなければならず、それをおこなうだけの財政的基礎の拡大を要求しなければならぬであらう」(四一八頁)。
しかしそれと同時に、低位生産力地帯への集中的配付、なかく低位経済力農家への重点的導入の配慮や諸施設の整備、指導助成の強化、山林原野の解放などの措置も伴わなければならない。「それこそが酪農政策における当面の課題にほかならない」(四一九頁)。本章の執筆者は大要このように説いているが、どちら

かといえれば低位経済力地帯、低位経済力農家の「農家経済の更生」という観点からする論述が多く、「酪農経営の安定」という観点は比較的影が薄い。もつとも牝牛貸付制度に多く論及しているせいもあるうし、一応「農民保護的立場をつらぬこうとするならば」という条件を付して述べているわけであるが、それにしても低位経済力農家の立場に立つてゐることは否定できないようである。ことにそのことは人工受精施設対策や種畜対策等「技術政策」を批判した箇所(三九一頁)で明かである。もしそうだとすれば、第一章「酪農経営」の執筆者が「酪農経営の安定」の立場に立ち、その合理化、安定化の条件を探究するのとくらべて、対蹠的である。貸付牝牛の配布に関して二つの立場があつて、一つは酪農合理化もしくは乳製品コスト低下の立場から集中的導入を主張し、他は低位生産力地帯農家の更正を主張として、当該地帯

への集中的導入、とくに低位生産力農家への重点的配布を説き、「前者の立場にたつものが、いわゆる酪農関係者に多く、後者を主張するものが、農村問題に関心の深い現地の農政関係者に多い」(三八〇―三八一頁)ことが第四章の中で指摘されているが、はしなくも第四章こそが後者の立場に立ち、これにひきかえ第一章が主として前者の立場から論述をすすめるという相違の好見本を本書の中で見出すことができる。

四

ともあれ、本書において伊藤博士がかつて北海道の酪農経営は「未だ一定の類型として安定しているものではない」(「酪農経済論」)「これを一般的に見るならば経営的基礎に於て合理性を欠いている」(「北海道酪農業の動向と課題」前掲「研究」所載)と指摘されたことを、実態調査をつうじてはつきり確認された点は第一章の成果であり、まことに時宜を得たものであつた。ことに乳牛導入にさいして常に問題にされる、耕種商品生産部門と酪農部門との労働上における競合関係を強調されたことは特筆されてよい。ただ慾をいえば、価格関係によつて導かれる、土地利用、労働、土地利用手段等全般にわたる競合関係と、ならびにその反面たる補合関係にももつと立入つて論じてもらひたかつた。この点は今後の課題として残される結果になつた。

また「安定的な酪農経営を期待するためには、乳牛飼養農家に牛乳の商品生産者に育成することが必要であらう」(四三三頁)と説かれていることも充分理解できる。牛乳の商品生産者と飼養規模との関係については必ずしも明示しているわけではないが、牛乳の商品生産者としての物的、経営の一応のめどとしては、今日の物価条件のもとでは、おそらく一経営当り搾乳牛三頭、搾乳量三、〇〇〇貫という標準がそれに當るであらう。十勝においてこの標準で経営収支が償うといえるには、前述のごとくそれを立証するにたる資料がなお充分でないが、とにかく多頭数飼育でなければ収支償わないことは、すでに明かにされたところであつて(北海道農業研究所、研究資料第一二号『牛乳生産費の分析』参照)、こんごの問題としては、もつと一般化して価格との関連においていけば安定点を見定めることでなければならぬ。

第二章では、さきに『北海道酪農の研究』なかんづく『北海道酪農の經濟』において全道統計や既存資料を駆使してある程度明確にされた問題の領域を、あらためて十勝について具体的に掘りさげ、とくに資本に着目してそれと農民との関係について、さきの『研究』とは違つた視角から犀利な分析を行つて、資本の運動形態、蓄積形態を明かにし、注目すべき規定と結論とをひき出している。この点に関して今後討論がなされるとすれば、恐らく本章はそのさいの教程として役立つであらう。

第三章では「從來とかく看過されがちで、いわば未開拓の分野にぞく」(二五七頁)する酪農家組織の問題を採りあげて、実態を明かにすると共に、考察を付け加えられているが、この分野を開拓され、かつ今後の研究課題を示唆して後につづく研究に期待された執筆者のパイオニアとしての苦心と態度とに深く敬意を表さざるを得ない。

第四章では、さきに伊藤博士、西尾幸三氏等によつて採りあげられた戦前の酪農政策につづく戦後の動向と変容とを主題として分析されているが、けだし戦後酪農政策を論じつくして余すところがない。

以上全章をつうじて北海道酪農研究上に占める本書の意義と地位とはきわめて大きいといわねばならない。恐らく今後この成果の上に つぎと新たな研究が つみ重ねられていくことであらう。なお本所、支所協力のもとに、いろいろな悪条件を克服して、見事に共同研究をなしたことは、この成果に一層光を添えている。編者ならびに共同研究に参加した人びとに敬意を表したい。

一部は思い違いから、また一部は読み方の不足から、あるいは正しく理解していない点もあらうかと思われるが、もしそれがあつたとすれば寛恕を乞ふなければならない。

(北海道立農業研究所研究課長)